

2021年11月21日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書2章18～22節

説教題：新しい皮袋に

ある教会の掲示板に貼られた広告だそうです。「断食祈祷大会の参加費には、食事代が含まれています」。何かおかしい。断食が、それだけ難しいということでしょうか。私は、10月初旬に虫垂炎の手術を受けました。祈って頂けることの恵み、神が癒して下さるといふ恵みを、心底感じさせて頂いた経験でした。(皆様にお世話になりました。本当にありがとうございました)。術後は、3日間でしたか、点滴だけで過ごしました。4人部屋でしたが、朝、昼、夕と食事時になると「お食事ですよ」と声がして、私以外の3人の方のところに食事が運ばれます。私は、手術した部分が痛くて食べるどころではなかったのですが、しかし3人の方が食事をされる時の口を鳴らす音が良く聞こえるのです。良い匂いもします。美味しそうなのです。さすがに3日目には「食事が欲しい」と思いました。だから「今日から食事が出ますよ」と言われた時には、嬉しかったのです。点滴で栄養をもらっていたのですが、ちょっとした断食の経験でした。しかし4日ぶりの食事を早速完食したことを考えると、断食して祈る強さは、私にはないと思います。皆さんは、断食して祈られたことがあるでしょうか。

さて、今日の箇所は、「断食についての質問」と小見出しのつく箇所ですが、この箇所は私達に何を語るのでしょうか。

イエス様は「2章13～17節」で取税人レビを弟子として召されました。イエス様に従う決心をしたレビがまずやったことは、取税人仲間を招いて、そこにイエスを招待して食事をすることでした。それは、失われていた人が回復された喜びの宴会でした。当時、取税人は、人々からひどく嫌われ、蔑まれていました。彼らを嫌っていた代表格が「パリサイ人」と呼ばれる宗教指導者でした。取税人の集まっている食事に招かれても、彼らは絶対に加わらない。ところがイエスは、その食事に喜んで参加して、楽しく食事をされたのです。パリサイ人は、それが気に入りません。また、彼らは週に2回、月曜日と木曜日に断食をしました。「それが神を信じる者のすることだ」と思っていました。ところがイエスは、宗教家でありながら、断食どころか、楽しく食べているのです。「あいつは何を考えているのか」、彼らはそう思うのです。イエス様は、弟子達にも断食を強いられたようでした。そこで彼らが、イエス様とその弟子達の所に来て、難癖をつけることから、今日の箇所は始まります。

彼らはイエス様に言います。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか」(18)。「お前の弟子はなぜ断食をしない。なっちゃんないじゃないか。お前がちゃんと指導していないからだ」と言うことです。「ヨハネの弟子」というのは、イエス様の先駆者的な働きをしたバプテスマのヨハネの弟子です。「マタイ福音書」によれば、そこには、ヨハネの弟子達もいたようです。ヨハネは、パリサイ人とは全く違いますが、しかし、彼も断食をし、弟子達にも断食を強いたようです。だからこの人々は「信仰者なら断食をする、それが常識だ」と考えていたのでしょう。

断食、それ自体は、決して悪いことではありません。イエスも断食をされたし、「山上の説教」でも断食を教えておられます。しかし本来、断食とは、悲しみの表現だったのです。「神の不在を悲しみ、神の働きが見えないことを悲しみ、嘆いた」、その思いを表現したのが断食でした。あるいはバプテスマのヨハネは、神の裁きを恐れ、断食をして、裁きに備えようとしました。しかし、イエスは言われます。「花婿が自分たちといっしょにいる間、花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。花婿といっしょにいる時は、断食できないのです」(19)。聖書では、「花婿」は、神の譬えとして用いられます。神が「花婿」であり、神の民が「花嫁」です。イエスが「私

が花婿である」と言われ、「花婿が…いっしょにいる」と言われたのは、要するに「ここに神がいる」と言っておられるのです。これが、イエスの弟子達が断食をしない決定的な理由なのです。パリサイ人も、ヨハネのグループも「神が見えない、神の働きが見えない」と嘆いていました。あるいは、神の裁きを恐れて、断食をして備えました。しかし、神は来ておられました。神は、イエスにおいて働いておられたのです。どのように働いておられたのでしょうか。

「ザアカイの話」が、そのことについて教えてくれます。エリコの町で取税人の頭として働いていたザアカイも、人々から「罪人」と呼ばれ、「売国奴」として嫌われ、市民生活の中心である会堂からも締め出されていました。そういう状況ですから、身も心も固くして人々の目を跳ね返すようにして生きるしかなかったのです。その生き方が良いとは思わない。喜びが無い。しかし、どうして良いか分からない。だから「どうせ嫌われるなら」と開き直って、強欲に税金を取り立て、ますます孤立する道を歩いていたのです。しかしある日、イエスがエリコの町に来られました。背が低かった彼は、木の上に登ってイエス様を眺めていました。するとイエス様の方からザアカイに声を掛けられたのです。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょう、あなたの家に泊まることにしてあるから—(あなたの家に泊まりたいのだ)」(ルカ 19:5)。ザアカイは驚きました。しかしそれは、ザアカイが一番願っていたことでした。そのイエス様の愛に、ザアカイの心は溶かされました。そして彼は、その溶かされた心で「新しく生き直そう」と立ち上がるのです。ザアカイは言いました。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します」(8)。「半分を施しに使います。残りの半分は償いに使います」。彼は、ほとんどの財産を投げ出しても良い、と思ったのです。それほど嬉しかったのです。それほど感謝したのです。これがザアカイの経験した救いでした。「神の働きが見えない」と嘆く必要はなかった。神は、イエスにおいて働かれました。そこには慰めがありました。喜びがありました。神は、そのような形で働いておられたのです。

聖書では、「救い」と「慰め」は時に同義語です。現実の生活において、私達には様々な悲しみがあります。皆さんも、心に色々な悲しみがあることでしょう。興味深いことに、聖書の「慰め」という言葉は、「悲しみ」という言葉から派生した言葉です。それはつまり、悲しみのあるところに、その悲しみを覆う慰めを、主が下さるということです。その慰めを経験する時に、主への感謝がやって来るのです。過去の出来事に対する悲しみも、悲しみのままでは終わらない、主が違うものに変えて下さるのです。

カナダでお会いした1人の姉妹は、ご主人が若くして病気で召されて行く、その悲しみの中で信仰を持たれた方でした。ご主人が病床洗礼を受けられたことは大きな慰めでしたが、当然ながらご主人のご召天は、姉妹には大きな悲しみの出来事でした。しかし、ご主人が召天された3年後に、姉妹は次のように証しをされました。「なぜ、自分の人生にこんなことが起こるのか、苦しい杯を無理やり飲まされた感じでした。しかし今思えば、あの苦しみの時が、私にとって本当の意味で神様にお会いできた時でした。苦しみの中で神様に会えるということが、どれほど大きな恵みであるのか、後になってよく分かりました。主人の召天も、私達には見えない神様の永遠の計画の1つであったと受け止めています。神様はあの時以来、今に至るまで、私達が倒れないように溢れるほどの恵みで包んで来て下さいました。今、私達は、神様の祝福と平安の中で暮らしています。でもこれは、次の試練への準備期間だと思っています。次の試練の時も、その中で神様に信頼して、神様と深く出会う経験をしたいと願っています」。主だけがなし得る慰めだと思えます。同じようにイエスに深く出会った人々は、慰めを受けたのです。静かな、しかし深い喜びを、感謝を与えられたのです。その感謝、喜びを、悲しみの表現である断食で表すことはできないのです。主が共におられたのです。だからイエスを信じる群れでは、時に断食をすること

があっても、それが「信仰のしるし」とはならなかったのです。

確かにイエス様は「しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します」(20)と言われました。それは、イエスが十字架に架かれる時のことです。その時、弟子達は、断食というか、食事も喉を通らないほどの絶望を味わいました。イエス様を裏切った自分達を責めることもしたことでしょう。しかし、イエスは甦られました。甦ったイエスは、また弟子達と共にいて下さり、共に食事をして下さったのです。イエスは、やがて天に帰られましたが、今度は、聖霊として弟子達と共におられました。弟子達には、主と共におられるという希望がありました。だから、イエス様を信じる群れにあっては—(繰り返しますが)—「神が見えない」と断食することが「信仰のしるし」とはならなかったのです。

では、何が「信仰のしるし」となったのでしょうか。私達も、同じように、聖霊としてイエスが共にいて下さいます。主の恵みと憐れみの中に生かされています。私達にとっても、何が「信仰のしるし」となるのでしょうか。

イエスは「新しい酒は新しい皮袋に入れるのです」(22)と言われました。新しいブドウ酒は発酵を続けてガスを出すそうです。古い、固い皮袋では、そのガスの圧力を受け止めることができません。新しい、柔らかい皮袋でなければダメなのです。何を言っておられるのか。イエスはこの比喻を通して、イエス様を受け止められる「新しい皮袋」になること、つまり新しい信仰を持つことを勧められておられるのです。それはまた「古いものに継ぎを当てるような信仰でもダメだ」と言われます。新しくなることが勧められているのです。しかし私達は、なかなか変わろうとしない者ではないでしょうか。変わることは難しいです。だから私達は、往々にして、イエス様を信じることによって、慣れ親しんだ古い自分を少し変えて、そうやって信仰生活を生きて行こうとしてしまうのではないのでしょうか。しかし、繰り返しますが、イエスは「新しくなりなさい、新しい信仰を持ちなさい」と言われます。それがイエスの群れの「信仰のしるし」となるのではないのでしょうか。どのように新しくなれば良いのか、どのような信仰を持てば良いのでしょうか。

「百万人の福音」の11月号は「祈りが聞かれない時」というテーマでした。私達の信仰生活にも、祈りが聞かれないように思う時があります。自分の思うようにならないことも多いです。

「生きて行くことは難しいな」と思います。私は、拉致被害者の横田めぐみさんのお母さん、横田早紀江さんの文章に教えられました。横田さんは「ヨブ記」を通して信仰を持たれるのですが、信仰を持たれた時、「命は神が与え、神がとられる、人間は神にゆだね、ただ神に与えられたご用をすればよいのだ」(横田早紀江)と思われたそうです。そう思った時「神の光が差し込んで来た」と書いておられます。その時、彼女は宣教師を通して祈ることを教えられました。「ちょっとした時間でいいから祈りなさい。どんなことでも神様とお話をしなさい。その祈りのつみ重ねが大事ですよ…。それから、彼女を囲む「祈りの会」が生まれたのです。

私が感心するのは、それから40年、横田さんが祈り続けておられるということです。彼女は言われるのです。「神を信じたあの日から一度も祈りをやめようと思ったことはない」(横田早紀江)。なぜでしょうか。主と共におられることを、その信仰によって受け止めておられるからではないのでしょうか。その信仰で、主の愛に信頼し、主の中に希望を見、主の御手に全てを委ねておられるからではないのでしょうか。めぐみさんは、まだ帰って来られない。しかし主は、キリスト教を否定し、「物語のような聖書の話など信じられない。祈っても何もかわらないじゃないか」と言っておられた夫の滋さんを信仰に導く、という御業を見せて下さるのです。「神は時にかなって本当に麗しいことをなさる。祈りを聞いてくださるのだと感じた瞬間でした」(横田早紀江)と言っておられます。主は、慰めを、喜びを下さるのです。

私は思うのです。私達と共にいて、私達を愛し、時にかなって慰めを与えて下さる主、喜びを与え、感謝を与えて下さる主、その主を、どこまでも信頼し、期待し、委ね、そして祈り続けること、それこそが、私達の「信仰のしるし」なのではないでしょうか。「新しくなる」とは、色々な試練はある、しかしそれでも神に、主に信頼すること、期待すること、委ねること、祈り続けること、そこに身を置くこと、身を置くことに決断することではないでしょうか。聖書は言います。「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい」(ローマ 12:12)。その時、主は、様々な恵みを見せて下さるのではないのでしょうか。私達の信仰は、その主の恵みを受け止めることができるのではないのでしょうか。

実は、私自身、その線の向こう側に渡り切っていない、と思わされて、悔い改めています。線のこちら側にいて、時に神様に期待し、時に神様に失望し、時に神様を褒め称え、時に神様に呟く、そんなことを繰り返している自分がいます。だから、主イエスの醗酵するような豊かな恵みを受け止めそこなっているのではないか、と思うことです。

もう1人、宮原寿夫という方の言葉もご紹介します。この方は阪神大震災の時に、天井が落ちて来て、5歳のご次男を天に送られたのです。そんな経験をされながら、こう言われるのです。「信仰を持つということは、どんな状況でも、自分に思わしくない状況に思える時にも、必ず背後で神様が事を行ってくださっている、と考えられることでしょう。それが何であれ、今の自分にとって最善のことを神はしてくださっている、と思えることが信仰でしょうし、今までを振り返ってみて、確かにそうだったと思えることは感謝すべきことです」(宮原寿夫)。私は、この言葉の中にも、キリスト者の「信仰のしるし」を見る思いがします。

いずれにしても、イエスは、この個所を通して「私を与える慰めを、喜びを、いや私自身をしっかり受け取ることのできる新しい信仰を持ちなさい」と勧められています。変わることは難しいです。だからそれは、最終的には聖霊がして下さることです。そこに希望があります。しかし私達自身も変わることを、変えられることを求めて行くように、線の向こうに立つ決断をするように、勧められているのではないのでしょうか。その招きに応じて「変わること、変えられること」を祈り求めて行きましょう。心揺さぶられるようなことの中で、しかし主に信頼する側に立つ、主に期待し、委ね、祈り続ける、「望みを抱いて喜(ぶ)」、そのような「新しい皮袋」でありたいと願います。そして、地上に於いてそのような信仰を生きたその軌跡(足跡)は、生きている間に私達を、慰めと感謝に与らせ、信仰の祝福に与らせるだけではない。その歩みを通して私達の魂に刻まれたものは、私達が天の御国に帰った時にも、きっと永遠の意味を持つのです。